【 9 】

氏　　名	古　瀬　恒　介（ふるせつねすけ）
学位の種類	法　学　博　士
学位記番号	論 法 博 第 44 号
学位授与の日付	昭和54年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	マハートマ・ガンディーの人格と思想
論文調査委員	（主査）教授 勝田吉太郎　教授 野口名隆　教授 福島徳寿郎

論　文　内　容　の　要　旨

全六章からなる本論文は，インド・ナショナリズムの思想と運動史上巨大な足跡を残したガンディーの多様な思想を，とりわけ非暴力主義に焦点をあわせて論じようとする。非暴力思想は，たんに暴力の不行使，不殺生という側面にとどまるものでもなければ，政治運動の一手段に還元されるものでもない。それは，地上的，肉体的欲望からの解放をめざす絶えざる自己修練として，日常倫理の一切を包含するものであった。またそれは，その目標においてインドの政治的独立の達成をもって終るのではなく，なおその上に個々のインド人，さらにはインド国民の道徳的再生を志向するものであった。ガンディーは，暴力をもって人間の弱さのあらわれとみなしていた。

このように広かつユニークな非暴力主義を，著者はガンディーの多様な思想と行動の軌跡をとおして明らかにしようとする。まず第一章で，厳格な禁欲につらぬかれたガンディーの日常生活が描かれたあと，第五章と第六章においては，独立闘争の過程でのガンディーの思想と行動のうちに非暴力主義の展開が追究されている。多くのインド・ナショナリストたちが求めた「独立」とは，ガンディーの眼に，「好きなことを行なう特許権」のごときものにすぎないと映じた。彼にとってインドの独立とは，よの高い道徳的理想，すなわち，「自己支配ないしは自己統制」としてのスワラージの実現でなければならなかった。そして当然そこには，不可触賤民制の撤廃，ヒンドゥーとムスリムとの宗派対立の解消，法外な経済的不平等の是正など，旧来のインド社会の根本的な改革が含まれるはずであった。つまり，怒りや憎しみ，あるいは所有欲といった人間の感覚的，肉体的な欲望から解放されたインド社会の根底的再生をめざすものと受けとられていたのである。さらにガンディーは，インド社会の長い伝統に属していた世俗外的禁欲の倫理を世俗内的なそれへと転換させようとする考慮に導かれて，インドの独立闘争そのものを，非暴力主義の最高の顕現たらしめようとした。

政治運動の一形態としての非暴力主義は，もともとヨーロッパに端を発するものであったが，ガンディーの本領は，それをキリスト教の伝統からインド古来の精神文化的伝統へと移しかえ，その枠組のなかでとらえ直すことにあった。第二，第三章で，著者は非暴力の理念を原始仏教とヒンドゥーの聖典「バガバ

ッド・ギーター」のなかに求めている。非暴力の理念は，たしかに仏教的慈悲の観念と等質的なものではあるが，原始仏教特有の静寂主義や現世逃避的傾向とは無縁である。他方では，「ギーター」の説く世俗内的無私の行為（アナサクティ）とも相通じるものがありながら，しかもそこに濃厚にみとめられる暴力肯定的な要素とは無縁であった，と著者はいう。

ガンディーの思想と実践がインドの政治的現実を左右するほど巨大な革命的な力を発揮した根因は，彼の説く非暴力主義がインドの精神文化的伝統のなかにしっかりと根をおろしていたからであった。ガンディーこそは，インド民衆にとって，政治家であるよりも，まず遊行者や聖者さながらの人格と思われたのである。

とはいうものの，非暴力主義には，それが心情倫理として純粋に貫かれたとき，権力の強制的契機の作用する政治的世界とは，しよせん相容れない要素が秘められている。第四章において著者は，心情倫理と責任倫理との間にたち現われる二律背反を，ガンディーとともに概念的にはどうしても解きえないジレマンであると認める一方，ガンディー主義の意義は，かようなジレマンをしっかりと見すえ，両者の間の緊張と対立に耐えぬくことにある，と論じる。ガンディーにとってこうしたジレンマは，帰するところ，自己の非暴力の実践の不徹底さを証拠たてるものと思われた。そしてそこにこそ，彼が政治的世界に関与すればするほど，ますます自己の生活の禁欲的陶冶へとかりたてられていく契機があった，と著者は結論づけている。

論文審査の結果の要旨

従来のわが国におけるガンディー理解は，ガンディーの言説と生涯のたんなる紹介であるか，それとも社会経済史的視点からなる外在的な批判や評論にとどまっていた，といってよいであろう。これに対して本論文は，ガンディー主義の特質を，彼自身の思想と行動の内在的な理解と批判とを通して検討する一方，それらをインドの精神文化的伝統のなかに位置づけようとする。およそあらゆる政治現象が各国に固有の政治文化的構造や伝統の影響をうけること，わけてもガンディーの声望，威信，影響力が，インド独自の政治文化をはなれてはとうてい理解しえない種類のものであることを考える時，こういう著者の試みは，適切なものであると評価できよう。

他方，本論文はガンディーの非暴力主義のうちにも，政治的世界や政治的行動にほとんど宿命的な仕方でつきまとう強制的契機や暴力の要素がたち現われることを指摘する一方，それを克服しようとして，ますます日常生活の細部をも禁欲的規制の下におこうとしたガンディーの悲劇的な苦闘を描くことによって，たんにインド政治思想の研究にとどまらぬ普遍的な問題提起をなしていると評価できるであろう。

しかしながら，ガンディー亡きあとのインドの政治社会の現実を考慮する時，ガンディー主義の今日的な意味に関する視座が必ずしも十分明瞭に設定されていない点に問題がある，といえるであろう。このことは，ガンディー主義の本質に迫ろうとして彼の言説に沈潜するあまり，ガンディーの生きた時代の具体的な政治社会状況と彼の思想と実践との間のダイナミックな対応関係が，必ずしも十分に追跡されていないこととも関係があると思われる。このような問題点が認められるにせよ，本論文が，従来わが国におけるインド政治思想史研究の空白を埋めるものであるという評価をいささかなりとも減じるものではない，

といえよう。

よって，本論文は法学博士の学位論文として価値あるものと認める。